

Shanti

公益社団法人
Shanti国際ボランティア会

2020.4.春
Vol.304
Shanti

巻末
言

道



クラフトエイドに かける思い

Shanti国際ボランティア会

理事 渡邊智恵子

株式会社アバンティ 代表取締役会長



東北グランマの女性たちと筆者(中央)

私はいま68歳。23歳で大学を卒業してからずっと仕事をしてきて、早45年になります。私には仕事が人生であり、希望であります。2011年3月の東日本大震災で一夜にして仕事も家族も家も全て失った人たちに心を馳せました。私は支援に十分なお金も人もありませんでしたが、とにかく彼らに特に女性たちに仕事を作ろうと考えました。

仕事を作るということは息の長い支援になっていくと確信していました。

そこで6月には被災地の小さな小さな漁村の宮城県石巻市大指に出向き、何もすることができず避難所にいる女性たちと会いました。その後から陸前高田市、本吉郡南三陸町と被災地に出向き、約50名の女性たちにオーガニックコットンの端布でクリスマスオーナメントを作ってもらいました。人数は少なくなりましたが、いまだにこの東北グランマの仕事作りのプロジェクトは活動を続けております。

時を同じくしてShantiの理事に就任し、クラフトエイドを担当させてもらっています。

仕事に対する渡邊の気持ちを考えるとクラフトエイドに関わるのは必然のようにも感じています。

「本のを、生きる力に。」のShantiのスローガンで育った子どもたちが社会に出て仕事をして、Shantiのクラフトエイドに関わるとしたらなんと素敵なことだろうと。

この東北グランマの仕事作りの女性たちとカンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、アフガニスタンの女性たちの技術が一緒になってクラフトエイドに関わってくれるとするならワクワクしてきます。

これから災害はもっともっと頻繁に起きてくるでしょう。そのときに私たちは何ができるのでしょうか。

人が生きる生きがいとはなにかをいつも見据えながら、いつか我が身という意識でこれからも明るく元気に！

特集
クラフトエイド
35周年



クラフトエイドは、アジアの女性たちが、時間と労力をかけて丁寧手作りしたものを販売するシャンティのフェアトレード事業です。現地のパートナー団体を通じて、正当な価格で買い取り、代々伝わる民族の刺繍や織りなどの伝統文化や技術を日本の皆さまへご紹介してまいりました。そんなクラフトエイドの取り組みが、35年目に突入しました。日本のフェアトレードの源流の一つとも言われるクラフトエイドのこれまでと、フェアトレードの潮流や伝統文化を受け継ぐ作り手たちの今について、ご紹介します。

Shanti vol.304 CONTENTS

- 4 特集
クラフトエイド35周年
- 16 世界の絵本を読んでみよう
「特別な子ども」
ラオス 2014年
- 18 世界のおやつ旅
ラオスのおやつ/カオ・ノム・チョック
- 19 世界の現場からAIRMAIL
From 活動の現場 & 現地の子どもりポート
▶ラオス事務所
- 26 Shanti@Tokyo
- 28 シャンティな人たち
安井 浩美
シルクロード・バーミヤン・ハンディクラフト 代表
- 30 ファインダーをのぞいて
「ネパールのどぶろく、チャン」
- 31 お知らせ
- 32 道
クラフトエイドにかける思い
シャンティ国際ボランティア会 理事 渡邊 智恵子
(株式会社アバンティ 代表取締役会長)



今号の表紙

北タイのモン族の村で
刺繍をする女性たち
©Hiroataka Hashimoto



日本のフェアトレードの源流の一つ

1946年に、アメリカのキリスト教系のグループがプエルトリコの女性たちを支援するため、手芸品を購入し、販売し始めたのがフェアトレードの始まりと言われています。1950年代にヨーロッパで広まり、1985年に英国生協主催の国際会議で初めて「フェアトレード」という言葉が用いられたとされています。その後、いくつものフェアトレードの団体やネットワークが立ち上がり、さまざまな基準が生まれました。1997年に国際フェアトレード・ラベル機構(FLO)が設立し、フェアトレードの基準が守られて

いることを証明する「国際フェアトレード認証ラベル」が誕生しました。

一方、日本では、各団体が独自の基準を設け、各国の生産者と直接取引してきました。1985年にシヤンティが行うタイのバンビナイ難民キャンプ支援の一環として始まった「クラフトエイド」が、日本のフェアトレードの源流の一つと言われています。

2019年に一般社団法人日本フェアトレード・フォーラム(FTFJ)が行った調査によると、日本国内のフェアトレードの認知率は32.8%と、3年前から3.5ポイント上昇しています。

フェアトレードの市場規模に関する正確な統計はありませんが、世界130カ国以上で流通する国際フェアトレード認証製品の推定市場規模は2017年、約9470億円に達しました。日本の国際フェアトレード認証製品の推定市場規模は約124億円(2018年)で、年々拡大傾向にあります。



35周年



フェアトレードとは

直訳すると「公平(公正)な貿易」。生産者や労働者の生活環境を改善し、自立を目指すため、適正な価格で継続的に売り買いすることです。フェアトレードには、労働者に適正な賃金を支払うこと、労働環境の改善、自然環境への配慮、地域社会への貢献などが基準に含まれています。

フェアトレードが目標達成に貢献する「持続可能な開発目標(SDGs)」のゴール

- | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|----------------------|
| 1 貧困をなくそう | 2 質の高い雇用を創出 | 5 ジェンダー平等を實現しよう | 8 働きがいも経済成長も |
| 12 つくる責任 つかう責任 | 13 気候変動に具体的な対策を | 16 平和と公正をすべての人に | 17 パートナーシップで目標を達成しよう |





ミャンマー (2015年～)

ミャンマー各地のさまざまなハンドメイド雑貨を販売する「dacco.myanmar」と取引を開始。

ミャンマー事務所 (2014年開設)

- ・学校建設
- ・初等教育、公立図書館における読書推進活動

難民キャンプ (1985年～)

タイ東北部のバンビナイ難民キャンプで、モン族の女性が作った刺繍製品などを日本で販売。

ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所 (2000年開設)

- ・コミュニティ図書館を通じたノンフォーマル教育支援事業

タイ (1989年～)

バンコクのクロントイ・スラムに開設した職業訓練センターで作られたモン族の刺繍や手織りの布の商品販売を開始。

シーカー・アジア財団(SAF)
元シャンティ・タイ事務所 (1991年設立)

- ・教育の機会改善事業(奨学金事業)
- ・移動図書館活動を通じた読書推進活動

ラオス (1986年～)

バンビナイ難民キャンプでモン族の民芸品の販売を支援していた「カマ・クラフト」の商品を販売。

ラオス事務所 (1992年開設)

- ・学校建設
- ・移動図書館を通じた読書推進活動
- ・複式学級の運営改善

カンボジア (2000年～)

カンボジアの職業訓練センターの商品を販売していた「クロマー・クロスショップ」との取引を開始。

カンボジア事務所 (1991年開設)

- ・学校建設
- ・図書館活動を中心としたコミュニティラーニングセンター事業
- ・公立幼稚園における幼児教育の質の改善

クラフトエイドのはじまり

クラフトエイドのはじまり

シャンティは1985年から約7年間、タイ東北部にあったラオスからの難民が暮らすバンビナイ難民キャンプで、印刷所と図書館活動を中心とした支援を行ってきました。難民キャンプの図書館に遊びに来る子どもの中には、刺しかけの刺繍布を持ってきて、遊びの合間に一心に刺繍を指し始めるモン族の女の子がいました。ラオスから逃れてきたモン族の人々は、難民となり民族衣装を着なくなった暮らしの中でも、子どもたちに刺繍を伝えていたのです。タイのNGOがキャンプ内で

縫製の指導を行い、製品化された刺繍をシャンティが購入し、日本で難民支援バザーを開催したことからクラフトエイドが始まりました。

女性たちに民族の伝統や手芸の技術を活かして商品を作ってもらうことは、民族の誇りやアイデンティティ、そして女性たちの尊厳を守ることにつながりました。女性たちは誰かから支援してもらったお金ではなく、自らが働いて得たお金で、子どもに文房具や教科書を買うことができるようになったのです。

やがて人々は母国へ帰還し、難民キャンプは閉鎖されました。しかし、生活に困窮している人々は難民キャンプだけにいるわけではありません。住む地域や環境の違いによって生じる教育の格差を縮めるため、シャンティはアジア各国に事務所を置き、支援事業を続けてきました。

クラフトエイドはアジア各国で民族独自の伝統や技術を活かした商品づくりに取り組んできました。



リス族



モン族

■ 民族紹介

人口はタイの山岳民族全体の4%ほど。美しく豪華な民族衣装や盛大な正月祭りの踊りなどが有名で、タイ北部観光の看板的な少数民族となっています。頭にも大きな飾りをつけて、腰には「馬の尻尾」と呼ばれる先にポンポンが300個ほどついたベルトを巻きます。女性たちの衣装にかけた熱意は強く、虹のような色彩の「重ね縫い」や細かなパッチワークなどで豪華さを競い合います。



■ 民族紹介

「自由な人々」という意味。スカートの色や模様で、青モン、白モン、黒モン、花モンなどのグループに分かれています。揚子江流域が起源で、中国で漢民族に迫害され、ラオスやベトナムに移住してきました。そのため、今も誇り高く、独立心が強いと言われています。迫害の歴史の中を生き抜いてきたモン族の刺繍や模様には、母から娘へ、家族の幸福を願う女性たちの祈りが込められています。



—— 手仕事の紹介 ——

重ね縫い

色とりどりの布を細かく切って折りたたみ、一本ずつ布を重ねて縫い合わせる技法です。重ねて縫うため丈夫で、民族衣装の襟や袖口を彩ります。



代表的な商品「リス族重ね縫いサコッシュ」

—— 手仕事の紹介 ——

刺繍

モン族は文字を捨て、刺繍の絵柄で生活の様子や歴史、文化を伝えてきました。女性たちが一つひとつ手で刺した動物たちの表情はどれもユニークで、独特の味わいを持っています。



代表的な商品「ラオスの森ポーチ」

クラフトエイドはアジア各国で民族独自の伝統や技術を活かした商品づくりに取り組んできました。

— 手仕事の紹介 —

織物（腰機）

家の柱と腰のベルトに糸をつなぎ、身体を巧みに使って経糸の張り具合を調整する「腰機（こしばた）」と呼ばれる方法で、畑仕事や家事の合間に続けています。



©Yoshifumi Kawabata

カレン族

■ 民族紹介

ミャンマーの先住民で、北タイ地域の山岳民族の50%近くを占める民族です。未婚女性は白いシンプルなドレス、既婚女性は華やかな装飾を施した黒いブラウスを身に着けます。自然との調和を重んじ、植物の種を縫い込んだ装飾や自然と共生する農法に、その姿勢を見ることが出来ます。母系制で、女性が家族の長であり、プロポーズも女性からするそうです。



代表的な商品「ランチョンマット」

— 手仕事の紹介 —

織物（織り機）

普段着としても使われている伝統的な織物「スン」の複雑な模様を織るための経糸の掛け方は、母から娘へ受け継がれ、織り手の頭に記憶されています。しっかりと織り上げた生地は丈夫で軽く、洗濯もできます。絹のような光沢感があり、さまざまなシーンで活躍します。

代表的な商品「スンバック」



©Hiroataka Hashimoto

クメール族

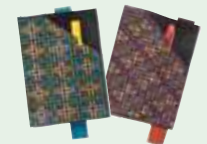
■ 民族紹介

カンボジアの約9割を占めるクメール族は、シルクを使った「ホール」「ピタン」「クロマ」など高度な織物文化を持っています。「黄色の生糸」と呼ばれるカンボジアシルクは独特の光沢と糸の強さがあります。複雑な絹緋（きぬかすり）の模様の多くは記録されておらず、母から教えてもらった手の記憶で細かい模様を作り出しています。

— 手仕事の紹介 —

刺繍

民族独自の幾何学模様の刺繍が特徴で、モン族と並び、刺繍自慢で知られる民族です。



代表的な商品「手刺繍ブックカバー」

— 手仕事の紹介 —

パッチワーク

ラフ語で「小銭入れ」という意味のフグビには、「犬の歯」や「目」など狩猟民族らしい生活に密着した模様が描かれています。



代表的な商品「フグビ」



ミエン族

■ 民族紹介

「人」という意味を持ち、世界的にはヤオ族と呼ばれています。中国中部に起源を持ち、東南アジアへ南下してきました。漢族との関わりが深く、道教や漢字などの影響を受けています。赤いウールの襟飾りがついた上着と、全面を覆いつくすほどの刺繍が施されたズボン、藍染のターバンが民族衣装です。刺繍ができることは容姿よりも大切にされ、女の子は10歳までに自分のズボンを作れるようになるため、5歳ぐらいから刺繍を習い始めます。

ラフ族

■ 民族紹介

「虎を狩る」という意味で、狩猟採集民族です。勇ましい名前と異なり、温和で「折り」を大切にしている民族で、家族の健康や村の繁栄、動物たちなど、身の回りのあらゆることを祈願しています。中国の雲南省、ミャンマー、タイ北部などで暮らし、文字を持たない民族で、伝統的なパッチワークの中に生活に密着した模様を描きます。クリスマスチャンへの改宗率が高く、土着の信仰とキリスト教が融合した独特の世界観を持つのも特徴です。



©Hiroataka Hashimoto

経済的に困難な人々の自立を助け、生産者や子どもたちの暮らしを支えるパートナーをご紹介します。



訓練センターで縫製を学び、20歳の頃からクローマー・クロスショップで働いています。父がラジオで訓練センターのことを聞いて、私を連れてきたのがきっかけです。市場でいろいろなデザインのバッグを持っている人を見て、私も素敵なバッグを自分で作りたいと思い、訓練センターに通い始めました。今はリーダーとして、若い人や新しく入った人を指導しています。バッグづくりで一番難しいのは肩紐の部分です。中にスポンジが入っているので、ミシンで縫うのが難しいのですが、今はもう慣れたので大丈夫です。



イン・サナリーさん
(40歳：女性)
ブノンベン出身

クローマー・クロスショップ／カンボジア
1991年にシャンティの事業として開設されたブノンベンの「日本カンボジア友好技術訓練センター」に併設された生産者団体です。縫製を学ぶ訓練生の実践の場として、1996年に設立されました。売上は洋裁技術の普及とセンターの運営費に充てられます。売上は洋裁技術の普及とセンターの運営費に充てられます。売上は洋裁技術の普及とセンターの運営費に充てられます。売上は洋裁技術の普及とセンターの運営費に充てられます。



2年前からシーカーの縫製所で働いています。以前はお酒のボトルにシールを貼る日雇いの仕事をしていました。シーカーで働いていた従妹から聞き、ミシンを少し使えたので応募しました。タープ素材は割れやすいので注意して縫う必要があったり、働き始めた1年目はすべての作業が難しいと感じました。今は仕事が好きです。日雇いは収入が安定しなかったけど、毎月一定の収入が入り、貯金ができるようになりました。



スラットさん
(47歳：女性)
クロントイ出身

シーカー・アジア財団／タイ
バンコクのクロントイ・スラムで子どもたちや青年の生活の質の向上を目指し教育文化支援を行うシャンティのバンコク事務所が、1991年9月に現地法人化された団体。少数民族の女性が手仕事で刺繍した布を購入し、財団内の縫製所で加工した商品を作っています。

作り手とシャンティを結ぶ「パートナー団体」



クラフトの商品を作る責任者をしています。刺繍は難民キャンプにいた頃、13歳の時に学びました。息子が4人、娘が3人いますが、娘の一人は、バンコクにある教員養成学校に通い、小学校の先生になる予定です。村では、6~8歳頃から刺繍を習い始め、見様見真似で作れるようになる子もいます。刺繍の商品で得た収入は、子どもたちの教育費や病院へ行くために使っています。私たちは刺繍をすることしかできませんが、日本の皆さん、ぜひ私たちの商品を買ってください。



ミーハーさん
(50歳：女性)
モン族

シビライ村／ラオス
1985年から1992年まで、タイ東北部にあった難民キャンプから帰還したモン族の人々が暮らしている村です。十分な農地がないため、貴重な現金収入を得られるよう、モン族の伝統的な刺繍技術を活かして商品を作ってもらい、公平に賃金が行き渡るよう村の女性全員から買い取っています。



「重ね縫い」は母から学び、友達と一緒に作りながら覚えました。15歳の頃からTTCよりオーダーを受け、商品を作り始めました。作ったものを市場で売ることもできますが、いつも安く買われてしまいます。TTCの方が高く買い取ってくれます。市場のバイヤーは次も買ってくれるかわかりません。TTCは継続的に買い付けてくれます。昔はたくさんオーダーがあり、120人の女性が一緒に作っていました。最近、村を出て行く人も多く、クラフトを作っている人は6人だけです。「重ね縫い」は細かいものが伝統ですが、若い人は太い重ね縫いしかできません。



ジーフミさん
(49歳：女性)
リス族

Thai Tribal Crafts Fair Trade (TTC)／タイ
タイ北部チェンマイ県にあるフェアトレード団体です。ミャンマーから避難してきたラフ族のクラフトづくりから始まり、民族ごとの技術を活かした商品を作り、人々の暮らしを支えています。



©Hirota Hashimoto



©Hirota Hashimoto

35年の間に、作り手を取り巻く環境は変化してきています。村の外へ働きに出る女性が増え、刺繍や織物をする時間は減りました。時代は変わっても、家族と暮らす時間を大切に、民族の文化や伝統を守りたいと願う人たちもいます。スラムで生活する人たち、祖国を離れて生活しなければならぬ人たち、紛争で傷ついた人たち、痩せた土地で食べていけず出稼



やがて学びに変わるもの

ぎに行く人たちが、家事や農作業の合間を縫って制作するため、大量生産することはできません。

作り手の過度な負担にならないよう配慮しながら、日本のマーケットに合った魅力的な商品づくりを心掛けてきました。日本の皆さまに商品を選んでいただくことが、作り手たちの暮らしを支え、受け継がれてきた民族の伝統文化を守ることにつながります。



つながるための架け橋に

1985年にタイ東北部にあったバンビナイ難民キャンプで出会ったモン族の刺繍から始まったクラフトエイドが35周年を迎えられたこと、クラフトエイドを担当している私たち自身、大変うれしく思います。

これだけ長い間、皆様にご支持をいただけたのも、クラフトエイドの商品がそれぞれにストーリーを持っており、作り手の想いが伝わってくる商品だからではないでしょうか。作り手の表情や生活、置かれた環境や生きてきた背景がそれぞれ違うように、同じ商品でも作り手によって、一つひとつ見せてくれる顔を変える商品たち。それがクラフトエイドだからこそ生み出せる魅力であると感じています。

2030年までに世界が取

り組むべき「持続可能な開発目標（SDGs）」の中に「目標12 つくる責任つかう責任」という目標が掲げられています。適正な価格での取引、労働環境の改善、自然環境への配慮、地域社会への貢献など、ものを作る側の責任は、今後さらに広がりをみせていく中、「つかう責任」としてお客様さまがクラフトエイドの商品を長く愛用され、一生モノのお買い物として納得して選んでいただける商品になるよう今後もものづくりに励んでまいります。また、作り手とお客さまが商品を通してつながるための架け橋として、お互いが幸せになれる社会を目指してまいります。

クラフトエイド課

嘉味田倫慧、高橋布美子



クラフトエイドのロゴ：
テーマは「つながる」。作り手である女性たちとつながりますように、と想いを込めて「CRAFT」と「AID」のAをつなげました。



特別な 子ども

1



むかしむかし、子どもに恵まれない夫婦がいました。夫婦は毎日、神様にお祈りをしていました。

2



ある時夫婦は、木の下で赤ちゃんを見つけ、家に連れ帰りました。水浴びをさせると、赤ちゃんにかかった水が金銀に変わったのです。

3



金銀がもつと欲しくなった夫は、水をかけ続けました。妻はかわいそうな赤ちゃんを夫から取りあげて、温めてあげました。

4



またある日、妻が出かけると、その隙に夫は赤ちゃんにたくさん水をかけました。

5



家に帰った妻は夫をとがめました。すると突然、強い風が吹いて、赤ちゃんはさらわれてしまいました。

6



家にあつた金銀も、すっかり消えてしまいました。夫は自分の欲深さを悔やみ、それからは夫婦で一生懸命働いて暮らしました。

世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
シャンティの様子や
スタッフを紹介します。

From LAOS

ラオス事務所

1992年よりラオスでの支援を続けるシャンティ。読書推進活動と学校建設に加え、複式学級運営を改善するため、教員の指導能力改善事業なども実施しています。活動を続ける現地の様子をご紹介します。



◀ 子どもの一日をレポート!

ラオス事務所のあるルアンパバーン市内に暮らすラオ族の女の子の1日に密着しました。



ものづくりの舞台裏をレポート! ▶

ラオスでは児童がより効果的に学習するために教員向けの手引きを制作中。その舞台ウラに迫ります。



ラオス事務所
総務担当
デンさんの
おすすめおやつ

みんなの笑顔をつくる
世界のおやつ旅



子どもの頃を思い出して ほっこりするおやつ

サバイディー(こんにちには)！ 私にとって家族団らんの味である「カオ・ノム・チョコック」について紹介します。子どもの頃、母がよく朝市で買ってきてくれてみんなで食べたおやつです。ラオス語で「コップのお菓子」という意味で、小さな柄杓のような型で作ります。蒸した緑豆とねぎを混ぜた具を型に詰め、ココナツミルクで溶いた小麦粉生地を流し込んでこんがりときつね色になるまで揚げれば完成。ほくほくとした食感と少し甘めの味付けが日本のコロッケのようなイメージです。黒コシヨウが良いアクセントになっています。できたてアツアツ是非！

ラオスのおやつ
カオ・ノム・チョコック
ຂ້າງນົມຈອກ



ラオス事務所の総務担当。主に法務や訪問の手配・日程調整などの業務を行っています。



ルアンパバーンのメインストリートにほど近い朝市で売られています。その場で作ってくれ、アツアツのものが食べられます。

Hot Topics



① パソコンスキルのワークショップを開催

事務所の職員向け人材育成研修の一環で、パソコンスキルの向上を目的としたワークショップを開催し、職員一人ひとりが各トピックを担当し、相互に学び合う形で実施しました。WordやExcelの便利な機能やパワーポイントの作り方などを学び、実りあるワークショップでした。特に、Excelの計算機能についてはさっそく実務に活かしています。

② 車両の修繕記録を見える化

これまで、車両の修繕については個別の支払い記録までさかのぼる必要がありました。しかし、業務の効率化を図るために、修繕の内容と金額を管理できるように、他の職員と一緒に一覧表をパソコンで作成しました。複数の職員が管理できるようになったことで、支払いの重複や、修繕のもれを防いだり、適正な価格を確認することが可能になりました。



ラオス事務所
チャンタヴォン・
アンパイヴォンさん

PROFILE

大学卒業後、2年間ホテルで勤務し会計業務を担当。2014年11月に入職。ラオス事務所で経理業務担当として勤務。人生のモットーは“何かを成し遂げるには、知識だけでなく忍耐も必要”。

事務をスムーズに進めるために工夫が必要
課題は、職員間で経理上のルールが完全には徹底されていないこと。支出処理には気を付けるべきポイントが多く、事業実施で忙しい職員がそれをすべて把握するのは大変なことです。一人ひとりがより注意深く支払処理を行えると、より業務がスムーズに進められると思います。



ラオス

From ラオス事務所

1992年よりラオスでの支援を続けるシャンティ。読書推進活動と学校建設などを実施しています。今回は経理スタッフにお話を聞きました。



身をもって知っている
ラオスの学習環境の乏しさ
ラオス事務所ですら実施している各業務の必要経費の支出や現金の管理、給与の支払いなどを行っています。一人でたくさん書類を処理しなければならず、大変だと感じることもあります。やりがいを感じながら仕事をしています。私はルアンパバンの町から少し離れた村で生まれ、小学校を卒業するまでそこで育ちました。そのため、子どもたちの学習環境の乏しさについては実体験として知っていました。シャンティのラオス事務所が、へき地の子どもたちの学習環境を改善する事業を行っていることを知り、経理業務を通して自分も何か貢献できればという想いもあり、入職しました。日本人スタッフと一緒に働く中で、担当業務はそれぞれ違っても、私たちは同じ目的に向かって取り組んでいるのだということを実感します。

現地の子どもレポート

ルアンパバーンに暮らす、ラオ族の女の子の1日をご紹介します。自然いっぱいの環境で、勉強にお手伝いに遊びに一生懸命な姿が見えてきました。

ラオスから オンノウマ・モナニヴォンさん(10歳) がレポート!



私のお気に入り

「家族で行くセーの滝」
ルアンパバーンでお気に入りの場所は、セーの滝です。正月など長いお休みの時には家族みんなで出掛け、そこでピクニックをします。この滝は、乾季に入るとすぐの水量が十分にある時期でない綺麗な滝ではないので、タイミングよく行ける時は心がうきうきします。

ルアンパバーン
Bieng Chan
Laos
ラオス

私が住んでいるのはこんな村

ラオス北部に位置するルアンパバーンは、メコン川とカーン川が合流する谷にあり、街と自然の調和がとても美しい街です。4月のラオスの旧正月では、旧年の穢れを払い、新年の運を呼ぶためお互いに水を掛け合う「水掛け祭り」が全国各地で行われ、たくさんの人々がお互いに水を掛け合いながら新年をお祝いします。

ラオ族の一人として、
ラオ語を教える小学校の先生になりたい

ルアンパバーン市内で、両親と2人の弟と一緒に5人で暮らしています。私はスポーツが好きで、週末にお寺の境内や校庭で友達とバドミントンなどをして遊ぶのを楽しみにしています。

将来の夢は、小学校の先生になることです。子どもたちが勉強に興味を持ってくれるよう優しくサポートできたらいいと思います。特に教えた科目はラオス語です。ラオス語の勉強はラオ族ではない子どもたちにとっては難しいと思います。ラオス語を母語とするラオ族の一人として、正しいラオス語を教えることができればうれしいです。



私の1日を紹介します!

おやすみなさい! ...zzzz

21:00 就寝

1日がスタート!

5:30 起床
顔を洗い、家の掃除を手伝ったり、弟の世話をしたりします。

7:30 朝食

家族そろって朝食をとります。日によって食べるものは変わりますが、もち米や焼き飯、パンなどが好きです。

7:45 通学

登校したらまず教室の掃除を行い、花壇の花や校内で育てている野菜に水やりをします。

8:00 授業

ラオス語の授業がある日は特に楽しみです。

19:00 夕食

家に帰って、ご飯の支度を手伝い、家族そろって夕食をとります。私の得意料理は野菜のスープです。食後には宿題をして、家族とゆっくり過ごします。

16:30 放課後

学校が終わったら、お母さんの屋台でお手伝いをします。お客さんが食べ終わった食器を片づけたり、洗ったりします。

12:00 お昼ご飯

お母さんが学校の前に出ている屋台で、焼き飯や米麺、ラオス北部名物のカオソイなどを友達と一緒に食べます。

1 小グループに分かれて 構成案について協議

ラオス教育スポーツ省、県教育スポーツ局、教員養成校の教官、シャンティ職員で構成するプロジェクトチームを立ち上げ、何度も会議を開いて内容について議論しました。また、北海道教育大学に技術指導をいただき、日本で長年用いられている教授法を参考にしましたが、ラオスの教育現場に適応できるように一部変更しています。



舞台の
ウラ側

2 過去に作成された資料を吟味

過去にラオスで作成された複式授業に関わる資料をできるだけ集め、それらを吟味して新しい手引きの構成を決定しました。次に教員養成校教官が中心となって各章の執筆を行い、その内容についてチーム全体で確認して修正を入れ、徐々に改定していきました。

3 研修で学び授業で実践

ドラフト版ができた後、それを用いて現職教員研修を行いました。研修では初めて学ぶ教授法に戸惑いを見せている教員もいましたが、その後の学校でのモニタリングでは、多くの教員が研修で学んだ指導法を用いて授業を行っていました。



©Yoshifumi Kawabata

From Laos / ラオス事務所

ものづくりの舞台ウラ

「複式学級運営の手引き」

ラオスでは、複式学級において効果的な授業を行うための教授法や教室環境整備、学習指導案などを紹介した手引きを制作中。その舞台ウラをご紹介します！



オモテ
舞台

児童がより効果的に
学習するための手引き

ラオスの小学校の約3割のクラスでは、2学年以上の児童が一つの教室で一人の先生から授業を受ける複式授業が行われています。しかし、多くの教員は複式学級で効果的な授業を行う教授法を知りません。その結果、教員が直接指導を行っていない時間、児童は友達と遊ぶなどとして勉強しない場合も多く、学習に支障をきたしています。それらを解消するため、教員が直接指導しない時間を有効活用し、児童が学習過程を適切に学べることなく効果的に学べる方法などを紹介した手引きを作成しています。

複数の教員から「この手引きによって、自信を持って複式授業を行えるようになった」という声があり、今後、実際に使用した教員の意見も反映させ、手引きを最終版に向けて改定していく予定です。

制作秘話 言葉の壁を越えて理解を深めていきました

制作にあたって最も困難だったことは、ラオスの人たちの考え方の違いや言葉のニュアンスの相違により、何度も議論が噛み合わなくなったことです。日本語の資料を参考にし、英語とラオス語で会議を行う中、通訳の解釈の違いなどもあり、こちらの言いたいことが正確に相手に伝わらないことが多々ありました。それでも、時間をかけて少しずつ解決していきました。





地元の高齢者からの うれしいお声掛け

サロン活動が続いている中でさまざまなお声をいただきます。借上住宅に住んでいる70代のお母さんから「息子夫婦と離れて暮らしていて、毎日静かすぎて困ってるの。みんなが集まれる場所があってありがたいわ」とうれしいお言葉がありました。



令和元年台風19号により決壊した千曲川流域の長野県長野市を中心に、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンと協働で被災地支援活動が続けてきました。発災当初、避難所での子どもたちの居場所づくりと日中避難所に取り残されがちな高齢者を対象としたサロン活動を実施。避難所閉所後は、場所を移して週末の子どもも広場とサロン活動を行ってきました。

人々がいきいきと生きられる
社会を築くための力へ

また、千曲市では被災して蔵書を失った市立更埴図書館への蔵書支援も行っています。

被災地域では、地元離れが続いています。災害によって住む家を失い、住んでいた地域から遠い借上住宅や仮設住宅に入ること地元で立ち寄る機会が少なくなるからです。被災した地域では更地が増えるなど地元の変化に戸惑う方々が戻る気力や体力をなくしていくのではないかと考えています。少しでも地元で立ち寄る機会が増え地元の方々と顔を合わせることができると場所が増えればどうでしょう。きっと被災者にとって心の勇気になるのではないのでしょうか。地道な活動ではありませんができる限り続けていきたいと考えています。

渡邊さんのお気に入りアイテム [ボールペンと手帳]

「UNIピュアモルト4&15機能ペン(MSXE5-2005-07)」です。5~6年使っていました。先日長野でついに壊れたので、また新しく買いました。「No.814ニューダイアリアルファ」も5~6年同じものを使用しています。どちらもこだわりで、使い慣れた物がいいですね。

PROFILE 渡邊珠人さん

大学卒業後、1年間飲食店に勤務。その後大本山總持寺にて1年間安居修行。2016年熊本地震の際にボランティア活動に出向いた先でシャンティと出会い、2017年4月入職。2018年7月より現職。



シャンティからのお知らせ

東日本大震災から9年 ～被災地間交流活動～

シャンティが発災直後から、現地の方々と共にやってきた支援活動は、新しい一歩を踏み出しています。陸前高田市のモビリア仮設住宅北集会所に開設した「陸前高田コミュニティ図書館」は2017年に地域のNPOに移譲しましたが、市の仮設住宅団地集約・撤去に伴い、3月15日をもって閉館となりました。また、近年多発する災害に対して、シャンティは支援活動を行ってきました。2019年、東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨で被災した子どもたちが交流するプログラムを愛媛、宮城、熊本で3回実施しました。参加した子どもたちは、復興について学び、各地域の自然を体験し、お互いの町の魅力を発表しました。プログラムを通して、子どもたちの自己肯定感や協調性、共感する力が高まるのを感じました。

人事のお知らせ

- 入職
堤 美加 総務・人事部 総務人事担当 (1/1付)
- 退職
岩松 智子 事業サポート課 カンボジア担当 (3/6付)
関 尚士 地球市民事業課 課長 (3/31付)

「絵本を届ける運動」18,080冊が出発

2019年度に集まった18,080冊の絵本がアジア各国へ向けて旅立ちました。2月13日、東京事務所からの絵本運び出しには、企業から19名、会議のため来日していたアフガニスタン事務所スタッフ9名が参加しました。絵本を受け取る側の現地事務所スタッフが運び出しを行ったのは、今回が初めてです。これまで日本国内で20万件を超える個人や団体、100社以上の企業のみなさまに参加いただき、1999年から33万冊を超える絵本を届けました。2020年は16,499冊を目標にしています。



■お願い

新型コロナウイルスの感染拡大防止と職員および関係者の安全確保のため、職員の在宅勤務や時差出勤を行っています。そのため、お問い合わせへの返答や郵送物の発送が遅れる可能性があります。また、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催される7月～9月も郵送物の遅延が予想されています。大変ご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

編集後記

3月、「学校へ通いたくても通えない」という状況を初めて経験した子どもたちも多かったのではないのでしょうか。今回の休校と、学校へ通えなかった経験を、世界の子どもたちの現状について考えるきっかけとしてもらえたらうれしいです。

(召田安宏)

シャンティ 2020年春号 (通巻304号) | 2020年4月1日発行

発行人：若林恭英
 発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
 〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
 TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
 WEB：www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp
 編集人：山本英里、鈴木晶子
 編集・制作：株式会社文化工房
 印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
 ©Shanti Volunteer Association.
 「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



川畑 嘉文(フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨てて写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。



チャンを注いでくれるお母さん。何よりもチャンが大切だそうです。



上：慣ましく生きるネパール山岳地域の夫婦
 下：荘厳な山々が連なる天空の村。都市からのアクセスが悪く村人は貧しい生活を強いられています。

ネパールでは食事代わりにチャンを飲む習慣があるのですが、家のお母さんが昼間から豪快に飲み続けているのには驚きました。

ネパールでは食事代わりにチャンを飲む習慣があるのですが、家のお母さんが昼間から豪快に飲み続けているのには驚きました。

目の前に置かれた水差しには乾いた泥のようなものが付着しています。中の液体は白濁していてとても怪しい感じ。コップに注ぎ、恐る恐る口に入れてみると、口いっぱい穀物の香りが広がりました。フルーティービールに近い味わいです。岩だらけの悪路を四駆車で数時間揺られ、辿り着いたネパールの僻地。雄大なヒマラヤ山脈が迫る天空の村で、一軒の家庭を訪れると地酒をご馳走してくれました。酒の名前はチャン(ネパール語ではジャール)。米や麦、トウモロコシなどを原材料とした醸造酒で、家庭で作られるどぶろです。

ネパールのどぶろく、チャン

